

今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧

地震調査委員会は、主要な活断層や海溝型地震（プレートの沈み込みに伴う地震）の活動間隔、次の地震の発生可能性〔場所、規模（マグニチュード）及び発生確率〕等々を評価し、随時公表している。平成17年1月12日現在、主要98断層帯のうち77断層帯、海溝型地震のうち南海トラフの地震（東南海・南海地震）、三陸沖から房総沖にかけての地震（宮城県沖地震を含む）、千島海溝沿いの地震（第二版）、日本海東縁部の地震、日向灘および南西諸島海溝周辺の地震、相模トラフ沿いの地震について評価をまとめ公表している。

1. 活断層の長期評価の概要

（陸域の活断層から発生する地震の今後30,50,100年以内の地震発生確率等）

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注1,2) (牛伏寺断層を含む区間)	8程度 (7 1/2～8 1/2)	14%	20%	40%	我が国の 主な 活断層の 中では 高い グループ に属する	約1000年 約1200年前
境峠・神谷断層帯 ^(注22) (主部)	7.6程度	ほぼ0%～ 13%	ほぼ0%～ 20%	ほぼ0%～ 40%		約1800年-5900年 約4900年前-3世紀
阿寺断層帯 (主部北部)	6.9程度	6%～11%	10%～20%	20%～30%		約1800年-2500年 約3400年前-3000年前
三浦半島断層群 ^(注3) (主部:武山断層帯)	6.6程度 もしくはそれ以上	6%～11%	10%～20%	20%～30%		1600年-1900年程度 約2300年前-1900年前
富士川河口断層帯 ^(注1)	8程度 (8±0.5)	0.2%～11%	0.4%～20%	1%～30%		1500年-1900年 約2100年前-1000年前
琵琶湖西岸断層帯	7.8程度	0.09%～9%	0.2%～20%	0.3%～30%		約1900年-4500年 約2800年前-2400年前
山形盆地断層帯	7.8程度	ほぼ0%～7%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%		およそ3000年 約6000年前以後
楡形山脈断層帯 ^(注4)	6.8～7.5程度	ほぼ0%～7%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%		3000年-18000年 約6600年-300年前程度
伊那谷断層帯 ^(注5) (境界断層)	7.7程度	ほぼ0%～7%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%		3000年-12000年程度 約6500年前-約300年前
石狩低地東縁断層帯 ^(注16) (主部)	7.9程度	0.05%～6% もしくはそれ以下	0.09%～10% もしくはそれ以下	0.2%～20% もしくはそれ以下		約3300年-6300年 約3300年前-5200年前 <small>もしくはそれ以後</small>
伊那谷断層帯 ^(注5) (前縁断層)	7.8程度	ほぼ0%～6%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%		4000年-20000年程度 約28000年前-7500年前
布田川・日奈久断層帯 ^(注6) (中部)	7.6程度	ほぼ0%～6%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%		約3500年-11000年 約7500年前-2200年前
砺波平野断層帯 ^(注7) (東部)	7.3程度	0.05%～6%	0.09%～10%	0.2%～20%		3000年-7000年程度 約4300年前-3700年前
山崎断層帯 (主部南東部)	7.3程度	0.03%～5%	0.06%～8%	0.1%～20%		3000年程度 約3600年前-6世紀
中央構造線断層帯 ^(注8) (金剛山地東縁-和泉山脈南縁)	8.0程度	ほぼ0%～5%	ほぼ0%～9%	ほぼ0%～20%		約2000年-12,000年 1-4世紀

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
京都盆地-奈良盆地断層帯南部 (奈良盆地東縁断層帯)	7.4程度	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	我が国の 主な 活断層の 中では 高い グループ に属する	約5000年
森本・富樫断層帯	7.2程度	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~9%	ほぼ0%~20%		約11000年前-1200年前
高山・大原断層帯 ^(注12) (国府断層帯)	7.2程度	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%		約2000年
木曾山脈西縁断層帯 (主部南部)	6.3程度	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%		約2000年前-200年前
神縄・国府津-松田断層帯 ^(注1)	8程度 (8±0.5)	4%	6%	10%		約3600年-4300年
砺波平野断層帯 ^(注7) (西部)	7.2程度	ほぼ0%~3% もしくはそれ以上	ほぼ0%~6% もしくはそれ以上	ほぼ0%~10% もしくはそれ以上		約4700年前-300年前
上町断層帯	7.5程度	2%~3%	3%~5%	6%~10%		約4500-24000年
三浦半島断層群 ^(注3) (主部:衣笠・北武断層帯)	6.7程度 もしくはそれ以上	ほぼ0%~3%	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~10%		約6500年前-3800年前
長岡平野西縁断層帯	8.0程度	2%以下	4%以下	9%以下		3000年程度
立川断層帯	7.4程度	0.5%~ 2%	0.8%~ 4%	2%~7%		約3000年前
岩国断層帯	7.6程度	0.03%~2%	0.05%~3%	0.1%~6%	約5000年-12000年 もしくはそれ以下	
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (恵那山-猿投山北断層帯)	7.7程度	ほぼ0%~2%	0.001%~3%	0.001%~6%	約6900年前-2700年前	
当別断層	7.0程度	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~8%	8000年程度	
新庄盆地断層帯 ^(注9)	6.6~7.1程度	0.7%~1%	1%~2%	2%~5%	約28000年-9000年前	
青森湾西岸断層帯 ^(注9)	7.3程度	0.5%~1%	0.8%~2%	2%~3%	1900年-4900年程度	
函館平野西縁断層帯	7.0~7.5程度	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	6-7世紀	
布引山地東縁断層帯 (西部)	7.4程度	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	我が国の 主な 活断層の 中では やや高い グループ に属する	約1200年-3700年
出水断層帯	7.0程度	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%		13世紀以降
頓宮断層	7.3程度	1%以下	2%以下	4%以下		10000年-15000年程度
長町-利府線断層帯 ^(注9)	7.0~7.5程度	1%以下	2%以下	3%以下		約20000年-13000年前
呉羽山断層帯 ^(注7、9)	7.2程度	0.6%~1%	1%~2%	2%~3%		約9000年-18000年
						約11000年-10000年前
						約7200年-14000年
						約7600年-5400年前
						7500年-15000年程度
						約11000年-2200年前
					2000年-4000年程度	
					特定できない	
					3000年-6000年程度	
					特定できない	
					13000年-17000年	
					14000年前以後	
					17000年程度	
					約28000年前-400年前	
					概ね8000年	
					約7300年前-2400年前	
					約10000年以上	
					約10000年前-7世紀	
					3000年程度以上	
					十分特定できない	
					3000年-5000年程度	
					特定できない	

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
中央構造線断層帯 ^(注8) (紀淡海峡-鳴門海峡)	7.7程度	0.005%~1%	0.009%~2%	0.02%~4%	我が国の 主な 活断層の 中では やや高い グループ に属する	約4000年-6000年
						約3100年前-2600年前
月岡断層帯	7.3程度	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%		7500年以上
山崎断層帯 (主部北西部)	7.7程度	0.08%~1%	0.2%~2%	0.4%~4%		約6500年-9000年前
六甲・淡路島断層帯 (主部/六甲山地南縁-淡路島東岸区間)	7.9程度	ほぼ0%~ 0.9%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~5%		約1800年-2300年 西暦868年(播磨国地震)
伊勢湾断層帯 ^(注10) (白子-野間断層)	7.0程度	0.2%~ 0.8%	0.3%~1%	0.7%~3%		900年-2800年程度
高山・大原断層帯 ^(注9,12) (高山断層帯)	7.6程度	0.7%	1%	2%		16世紀
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (屏風山断層帯)	6.8程度	0.2%~0.7%	0.4%~1%	0.8%~2%		8000年程度
養老-桑名-四日市断層帯	8程度	ほぼ0%~ 0.6%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%		概ね6500年前-5000年前
三方・花折断層帯 ^(注11) (花折断層帯中南部)	7.3程度	ほぼ0%~ 0.6%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%		4000年程度
増毛山地東縁断層帯 ^(注9,14)	7.8程度	0.6%以下	1%以下	2%以下		特定できない
鈴鹿東縁断層帯 ^(注1,9)	7.5程度	0.5%以下	0.8%以下	2%以下		4000年-12000年程度
福井平野東縁断層帯 ^(注9) (主部)	7.6程度	0.2%~0.4% もしくはそれ以上	0.3%~0.7% もしくはそれ以上	0.6%~1% もしくはそれ以上		特定できない
中央構造線断層帯 ^(注8) (讃岐山脈南縁-石鎚山脈北縁東部)	8.0程度 もしくはそれ以上	ほぼ0%~ 0.3%	ほぼ0%~0.6%	ほぼ0%~2%		1400-1900年
中央構造線断層帯 ^(注8) (石鎚山脈北縁)	7.3-8.0程度	ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.6%	ほぼ0%~2%		13-16世紀
中央構造線断層帯 ^(注8) (石鎚山脈北縁西部-伊予灘)	8.0程度 もしくはそれ以上	ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.6%	ほぼ0%~2%		4200年-6500年
鈴鹿西縁断層帯 ^(注9)	7.6程度	0.08%~0.2%	0.1%~0.3%	0.3%~0.6%		2800年前-6世紀
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (加木屋断層帯)	7.4程度	0.1%	0.2%	0.3%		5000年程度以上
山崎断層帯 ^(注9) (那岐山断層帯)	7.3程度	0.07%~0.1%	0.1%~0.2%	0.2%~0.3%		特定できない
生駒断層帯	7.0~7.5程度	ほぼ0%~0.1%	ほぼ0%~0.2%	ほぼ0%~0.6%		6000年以上
大阪湾断層帯	7.5程度	0.004%以下	0.007%以下	0.02%以下	十分特定できない	
有馬-高槻断層帯 (7.5±0.5)	7.5程度 (7.5±0.5)	ほぼ0%~ 0.02%	ほぼ0%~ 0.05%	ほぼ0%~0.3%	7000年-18000年程度 もしくはそれ以下	
					不明	
					約1000年-1600年	
					16世紀	
					約1000年-2500年	
					16世紀	
					約1000年-2900年	
					16世紀	
					約18000年-36000年	
					特定できない	
					30000年程度	
					特定できない	
					約30000年-40000年	
					特定できない	
					3000年-6000年	
					1600年前-1000年前頃	
					約3000年-7000年	
					9世紀以後	
					1000年-2000年程度	
					1596年慶長伏見地震	

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
伊勢原断層帯	7.0程度	ほぼ0%～ 0.002%	ほぼ0%～ 0.005%	ほぼ0%～ 0.01%		4000～6000年程度
						5世紀-18世紀初頭
布引山地東縁断層帯 (東部)	7.6程度	0.001%	0.002%	0.005%		25000年程度
						11000年前頃
北上低地西縁断層帯	7.8程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		16000年-26000年
						4500年前頃
跡津川断層帯	7.9程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		約2300年-2700年
						1858年飛越地震
庄川断層帯	7.9程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		約3600年-6900年
						11-16世紀
阿寺断層帯 (主部南部)	7.8程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		約1700年
						1586年天正地震
信濃川断層帯 (長野盆地西縁断層帯)	7.5～7.8程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		800年-2500年
						1847年善光寺地震
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (猿投-高浜断層帯)	7.7程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		40000年程度
						約14000年前頃
湖北山地断層帯 (北西部)	7.2程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		約3000年-4000年
						11-14世紀
湖北山地断層帯 (南東部)	6.8程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		概ね7000年程度
						15-17世紀
野坂・集福寺断層帯 ^(注13) (野坂断層帯)	7.3程度	ほぼ0% もしくはそれ以上	ほぼ0% もしくはそれ以上	ほぼ0% もしくはそれ以上	約5600-7600年 ^{もしくはそれ以下}	
					15-17世紀	
三方・花折断層帯 (三方断層帯)	7.2程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約3800年-6300年	
					1662年の地震	
濃尾断層帯 (濃尾断層帯主部/梅原断層帯)	7.4程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約14000年-15000年	
					1891年濃尾地震	
濃尾断層帯 (濃尾断層帯主部/根尾谷断層帯)	7.3程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約2100年-3600年	
					1891年濃尾地震	
濃尾断層帯 (温見断層北西部)	6.8程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約2200年-2400年	
					1891年濃尾地震	
六甲・淡路島断層帯 (主部/淡路島西岸区間)	7.1程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	1800-2500年程度	
					1995年兵庫県南部地震	
六甲・淡路島断層帯 (先山断層帯)	6.6程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	5000-10000年程度	
					11-17世紀初頭	
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 ^(注17) (主部北部)	7.7程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約2300年-2700年	
					17世紀頃	
関谷断層	7.5程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約2600年-4100年	
					14-17世紀	
木曾山脈西縁断層帯 (主部北部)	7.5程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約6400-9100年	
					13世紀頃	
山田断層帯 (郷村断層帯)	7.4程度 もしくはそれ以上	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	約10000-15000年	
					1927年北丹後地震	

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
木津川断層帯	7.3程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		約4000年-25000年 1854年伊賀上野地震
水縄断層帯	7.2程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		14000年程度 679年筑紫地震
山崎断層帯 (草谷断層)	6.7程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		5000年程度 5-12世紀
長尾断層帯	7.1程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%		概ね3万年程度 9-16世紀
津軽山地西縁断層帯 ^(注18) (北部)	6.8-7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 1766年の地震
津軽山地西縁断層帯 ^(注18) (南部)	7.1-7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 1766年の地震
福井平野東縁断層帯 ^(注21) (西部)	7.1程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 1948年福井地震
菊川断層帯	7.6程度 もしくはそれ以上	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 約8500年前-2100年前
濃尾断層帯 (温見断層南東部)	7.0程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
濃尾断層帯 (濃尾断層帯主部/三田洞断層帯)	7.0程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
濃尾断層帯 (揖斐川断層帯)	7.1程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 1-10世紀
濃尾断層帯 (武儀川断層)	7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 不明
長良川上流断層帯	7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 特定できない
木曾山脈西縁断層帯 (清内路峠断層帯)	7.4程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
阿寺断層帯 (白川断層帯)	7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
阿寺断層帯 (佐見断層帯)	7.2程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
境峠・神谷断層帯 (霧訪山-奈良井断層帯)	7.2程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (赤河断層帯)	7.1程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
鴨川低地断層帯 ^(注20)	7.2程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 不明
山田断層帯 (山田断層帯主部)	7.4程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 約3300年前以前
西山断層帯	7.3程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明 約12000年前-概ね2000年前

断層帯名	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	平均活動間隔
		30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
五日市断層帯 (五日市断層)	7.0程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 7-12世紀
五日市断層帯 (己斐-広島西縁断層帯)	6.5程度	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		特定できない 約23000年前以前
折爪断層 ^(注19)	(最大7.6程度)	不明(注15)	不明(注15)	不明(注15)		不明
						不明
元荒川断層帯	上尾市付近を境に北部と南部に分けられ、北部のみが活断層と判断される。					
東京湾北縁断層	活断層ではないと判断される。					
岐阜一宮断層帯	活断層ではないと判断される。					
荒川断層	活断層ではないと判断される。					

注1： 糸魚川-静岡構造線断層帯、神縄・国府津-松田断層帯、富士川河口断層帯及び鈴鹿東縁断層帯については、長期評価を公表した際には確率を示していなかった。これらの断層帯の確率は、「長期的な地震発生確率の評価手法について」(平成13年6月8日)に有効数字2桁で示されており、これまで本表ではその値を記述してきたが、平成17年1月12日より有効数字1桁で記述することとした。ただし、30年確率が10%台の場合は従来どおり2桁で記述する。

なお、有効数字2桁の場合の確率値は、以下のとおり

- ・糸魚川-静岡構造線断層帯 30年確率 14%、50年確率 23%、100年確率 41%
- ・神縄・国府津-松田断層帯 30年確率 3.6%、50年確率 6.0%、100年確率 12%
- ・富士川河口断層帯 30年確率 0.21~11%、50年確率 0.39~18%、100年確率 0.99~33%
- ・鈴鹿東縁断層帯 30年確率 0.50%以下、50年確率 0.83%以下、100年確率 1.7%以下

注2： 地震調査研究推進本部(1997)による全国の主要な98断層帯の区分では、糸魚川-静岡構造線断層帯は北部、中部、南部の3つに分けられている。牛伏寺断層は中部の一部であり、長期評価では「牛伏寺断層を含む区間」がどこまでか判断できないとしている。なお、最新活動時(1200年前)には、北部と中部が同時に活動した。

注3： 三浦半島断層群は主部と南部からなる。表には主部を構成する2つの断層帯の評価結果を示した。南部の評価の概要は以下のとおり。

マグニチュード：6.1程度もしくはそれ以上、過去の活動が十分明らかではないため30年確率は不明

なお、主部を構成する衣笠・北武断層帯と武山断層帯が同時に活動する場合は、衣笠・北武断層帯が単独で活動する場合と同程度もしくはそれ以上の規模の地震が発生すると評価されている。その長期確率はそれぞれが単独で活動する場合の長期確率を超えることはないとは評価されている。

注4： 楡形山脈断層帯の地震発生確率の最大値は、平均活動間隔が3千年で最新の活動が6千6百年前の場合で、その時の地震規模はマグニチュード6.8程度である。今後30年以内の地震発生確率が3%以上となる場合の地震の規模はマグニチュード7.2程度以下である。マグニチュード7.5の場合、今後30年以内の地震発生確率は0.5%未満である。

注5： 伊那谷断層帯は、境界断層と前縁断層の2つに分かれて活動すると評価されており、上表にはそれぞれの数値を示した。しかし、これらは1つの断層帯として同時に活動する可能性もある。その場合はマグニチュード8.0程度の地震が発生し、その長期確率は、境界断層と前縁断層がそれぞれ単独で活動する場合の長期確率を超えることはないとは評価されている。

注6： 布田川・日奈久断層帯は、将来、北東部、中部及び南西部の3区間に分かれて活動すると評価されている。上表には30年確率の最も高い中部区間の数値を示した。他の区間の評価の概要は以下のとおり。

北東部 マグニチュード：7.2程度、30年確率：ほぼ0%。

南西部 マグニチュード：7.2程度、過去の活動が十分明らかでないため30年確率は不明。

なお、中部と南西部は将来同時に活動する可能性も否定できず、この場合は、マグニチュード7.9程度で、その長期確率は不明であるが中部区間の発生確率より大きくなることはないとは評価されている。

注7： 砺波平野断層帯は、東部と西部からなる。表にはそれぞれの評価結果を示した。呉羽山断層帯は富山平野に位置する断層帯であるが、最近になって従来の見解よりも規模が大きく、その一部が砺波平野断層帯東部と近接していることが示され

注8： 中央構造線断層帯は、5つに分かれて活動すると評価されており、上表にはそれぞれの数値を示した。しかし、これらは1つの断層帯として同時に活動する可能性もある。その場合はマグニチュード8.0程度もしくはそれ以上の地震が発生し、その長期確率は、5つの区間が個別に活動する長期確率を超えることはないとは評価されている。

注9： 新庄盆地断層帯、青森湾西岸断層帯、長町-利府線断層帯、呉羽山断層帯、高山断層帯、増毛山地東縁断層帯、鈴鹿東縁断層帯、鈴鹿西縁断層帯、山崎断層帯(那岐山断層帯)及び福井平野東縁断層帯(主部)は、最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方により長期確率を求めている。このことに注意を要する。

注10： 伊勢湾断層帯は、将来、断層帯主部北部、断層帯主部南部及び白子-野間断層の3つに分かれて活動すると評価されている。上表には30年確率の最も高い白子-野間断層の数値を示した。断層帯主部(北部及び南部)の評価の概要は以下のとおり。

断層帯主部北部 マグニチュード：7.2程度、30年確率：ほぼ0%。

断層帯主部南部 マグニチュード：6.9程度、30年確率：ほぼ0%-0.002%。

なお、断層帯主部の北部と南部が同時に活動する可能性もあるとされ、この場合は、マグニチュード7.5程度で、その長期確率はそれぞれが単独で活動する場合の発生確率を超えることはないと評価されている。

注11：三方・花折断層帯は、三方断層帯と花折断層帯に分かれ、花折断層帯はさらに、北部、中部、南部に分かれると評価されている。このうち中部と南部が将来同時に活動する場合の地震発生確率が示された。北部ではマグニチュード7.2程度の地震が発生すると推定されるが、平均活動間隔が不明なため、地震発生確率等を求めることはできない。しかし、最新活動が1662年の地震である可能性があることから、近い将来の地震発生可能性は低いと考えられると注釈されている。中部と南部が別々に活動する場合、それぞれ、マグニチュード7.0程度、6.8程度の地震が発生すると推定されている。これらのうち、中部が単独で活動するとすれば、表に示された中南部が同時に活動する場合と同じ発生確率となる。しかし、この場合南部が単独で活動する場合の地震発生確率は不明である。

注12：高山・大原断層帯は、国府断層帯、高山断層帯及び猪ノ鼻断層帯に分かれると評価されている。このうち国府断層帯と高山断層帯について将来の地震発生確率が示された。ただし、高山断層帯は、最新活動時期が明らかになっていないため、地震発生確率はポアソン過程を適用して求めている。また、猪ノ鼻断層帯は、最新活動時期、平均活動間隔とも不明であるので、断層帯全体を一つの活動区間と仮定した場合の長さ(約24km)より、活動時の地震の規模のみを求めた。具体的な猪ノ鼻断層帯の評価の概要は以下のとおり。

マグニチュード：7.1程度、過去の活動が明らかではないため地震発生確率は不明

注13：野坂・集福寺断層帯は、野坂断層帯及び集福寺断層帯に分かれると評価されている。このうち野坂断層帯について将来の地震発生確率が示された。また、集福寺断層帯は、最新活動時期、平均活動間隔とも不明であるので、断層帯全体を一つの活動区間と仮定した場合の長さ(約10km)より、活動時の地震の規模のみを求めた。具体的な集福寺断層帯の評価の概要は以下のとおり。

マグニチュード：6.5程度、過去の活動が明らかではないため地震発生確率は不明

注14：増毛山地東縁断層帯の評価にあたっては、沼田一砂川付近の断層帯も併せて評価している。沼田一砂川付近の断層帯は、池田ほか(2002)で初めてその存在が報告された断層帯であり、最新活動時期、平均活動間隔とも不明であるので、断層帯全体を一つの活動区間と仮定した場合の長さ(約38km)より、活動時の地震の規模のみを求めた。具体的な沼田一砂川付近の断層帯の評価の概要は以下のとおり。

マグニチュード：7.5程度、過去の活動が明らかではないため地震発生確率は不明

注15：津軽山地西縁断層帯(西部、東部とも)、菊川断層帯、長良川上流断層帯、鴨川低地断層帯、五田市断層帯(五田市断層帯及び己斐一広島西縁断層帯)、木曾山脈西縁断層帯(清内路峠断層帯)、屏風山・恵那山一猿投山断層帯(赤河断層帯)、折爪断層、福井平野東縁断層帯(西部)、阿寺断層帯(佐見断層帯及び白川断層帯)、山田断層帯(山田断層帯主部)、西山断層帯、境峠・神谷断層帯(霧訪山一奈良井断層帯)、濃尾断層帯(温見断層南東部、濃尾断層帯主部の三田洞断層帯、揖斐川断層帯及び武儀川断層帯)は、平均活動間隔が判明していないため、地震発生確率を求めることができない。

注16：石狩低地東縁断層帯は、主部及び南部に分かれると評価されている。このうち断層帯主部について将来の地震発生確率が示された。また、断層帯南部は、最新活動時期、平均活動間隔とも不明であるので、断層帯全体を一つの活動区間と仮定した場合の長さ(23km以上)より、活動時の地震の規模のみを求めた。具体的な断層帯南部の評価の概要は以下のとおり。

マグニチュード：7.1程度以上、過去の活動が明らかではないため地震発生確率は不明

注17：柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯は、柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯主部及び浦底一柳ヶ瀬山断層帯に分かれると評価されている。さらに、柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯主部は、過去の活動履歴から、北部・中部・南部の3区間に分かれると評価されている。このうち柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯主部北部について将来の地震発生確率が示された。その他の区間は、最新活動時期、平均活動間隔とも不明であるので、断層帯全体を一つの活動区間と仮定した場合の長さより、活動時の地震の規模のみを求めた。それらの区間の具体的な評価の概要は以下のとおり。

柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯主部中部 マグニチュード：6.6程度、平均活動間隔が判明していないため地震発生確率は不明

柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯主部南部 マグニチュード：7.6程度、平均活動間隔が判明していないため地震発生確率は不明

浦底一柳ヶ瀬山断層帯 マグニチュード：7.2程度、過去の活動が明らかではないため地震発生確率は不明

注18：津軽山地西縁断層帯は、北部及び南部に分かれると評価されている。注15でも述べたように、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1766年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、最新活動と考えられる地震の規模が断層帯の長さ比べて大きいため、発生する地震の規模は幅を持った値としている。

注19：折爪断層は、将来の活動可能性を明確にするために必要な資料が十分得られていない。鮮新世の地層を大きく変位させているので、第四紀に活動した断層であることはほぼ確かであると考えられているが、第四紀後期に活動を繰り返していることを示す確かな証拠はこれまで発見されておらず、特に、北部の辰ノ口撓曲においては第四紀後期の活動性は衰えている可能性もある。このため、発生する可能性がある地震の規模についても、便宜的に最大値を記載しているものの、この値は断層帯全体が一つの区間として活動した場合の試算値に過ぎないことに注意する必要がある。

注20：鴨川低地断層帯に関しては、活断層であるかどうかの確実な証拠に乏しく、活断層としての存在そのものについて疑問視した調査結果も報告されている。よって、今後、本断層帯の活動時期や活動性に関する確実な資料を得る必要がある。

注21：福井平野東縁断層帯(西部)は、注15でも述べたように、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1948年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。

注22：境峠・神谷断層帯のうち、主部は、最新活動時期が3000年もの年代幅がある上に、平均活動間隔も3倍以上の幅がある。このため、これらの値から算出した地震後経過率は、0.3-2.7と大きな幅があり、地震発生確率も大きく幅を持たせた値となっていることに留意する必要がある。

上記表中、「ほぼ0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。

2. 海溝型地震の長期評価の概要（2005年1月1日算定値）

（海溝型地震の今後10, 30, 50年以内の地震発生確率）

領域または地震名		長期評価で予想した地震規模 (マグニチュード)		地震発生確率 (注1)			平均発生間隔 (注1) (上段)	
				10年以内	30年以内	50年以内	最近発生時期 (下段：ポアソン過程を適用したものを除く)	
南海トラフの地震 (注7)	南海地震	8.4前後	同時 8.5前後	10%程度	50%程度	80%程度	114.0年（次回までの標準的な値(注2) 90.1年）	
	東南海地震	8.1前後		10%～20%	60%程度	90%程度	58.0年前 111.6年（次回までの標準的な値(注2) 86.4年）	
三陸沖から房総沖にかけての地震	三陸沖から房総沖の海溝寄り	津波地震	Mt8.2前後 (Mtは津波の高さから求める地震の規模)	7%程度 (2%程度)*	20%程度 (6%程度)*	30%程度 (9%程度)*	133.3年程度 (530年程度)* * () は特定海域での値	
		正断層型	8.2前後	1%～2% (0.3%～0.6%)*	4%～7% (1%～2%)*	6%～10% (2%～3%)*	400年～750年 (1600年～3000年)* * () は特定海域での値	
	三陸沖北部		8.0前後	ほぼ0%+ ～0.1%	0.04%～7%	20%～40%	約97.0年 36.6年前	
	一回り規模の小さい地震		7.1～7.6	60%程度	90%程度	—	11.3年程度 —	
	宮城県沖		7.5前後	連動 8.0前後	50%程度	99%	—	37.1年 26.6年前
	三陸沖南部海溝寄り		7.7前後		30%～40%	70%～80%	90%程度以上	105年程度 107.4年前
	福島県沖		7.4前後（複数の地震が連続する）		2%程度以下	7%程度以下	10%程度以下	400年以上 —
	茨城県沖		6.8程度		50%程度	90%程度	—	15.5年程度 —
千島海溝沿いの地震（第二版）	十勝沖	8.1前後	連動 8.3程度	ほぼ0%+	0.02%～0.5%	9%～20%	72.2年(注3) 1.3年前	
	根室沖	7.9程度		1%～5%	30%～40%	70%程度	72.2年(注3) 31.5年前	
	色丹島沖	7.8前後 (Mw8.2前後) (注4)		3%～8%	40%程度	80%程度	72.2年(注3) 35.4年前	
	択捉島沖	8.1前後 (Mw8.5前後) (注4)		8%～10%	50%程度	80～90%	72.2年(注3) 41.2年前	

領域または地震名			長期評価で予想した 地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率 ^(注1)			平均発生間隔 ^(注1) (上段)
				10年以内	30年以内	50年以内	最近発生時期 (下段：ポアソン過程を適用 したものを除く)
千島海溝沿いの地震 (第二版)	ひとまわり規模の小さい地震	十勝沖・根室沖	7.1前後	40%程度	80%程度	90%程度	17.5年 ----- -
		色丹島沖・択捉島沖	7.1程度 (Mw7.7程度) ^(注4)	60%程度	90%程度	90%程度以上	10.5年 ----- -
	沈み込んだプレート内のやや浅い地震		8.2前後	10%程度	30%程度	50%程度	82.8年 ----- -
	沈み込んだプレート内のやや深い地震		7.5程度	30%程度	70%程度	80%程度	27.3年 ----- -
日本海東縁部の地震	北海道北西沖の地震		7.8程度	0.002～0.04%	0.006～0.1%	0.01～0.2%	3900年程度 ----- 約2100年前
	北海道西方沖の地震		7.5前後	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	1400～3900年程度 ----- 64.4年
	北海道南西沖の地震		7.8前後	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	500～1400年程度 ----- 11.5年
	青森県西方沖の地震		7.7前後	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	500～1400年程度 ----- 21.6年
	秋田県沖の地震		7.5程度	1%程度以下	3%程度以下	5%程度以下	1000年程度以上 ----- -
	山形県沖の地震		7.7前後	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	1000年程度以上 ----- 171.1年
	新潟県北部沖の地震		7.5前後	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	1000年程度以上 ----- 40.5年
	佐渡島北方沖の地震		7.8程度	1～2%	3～6%	5～10%	500～1000年程度 ----- -
日向灘および南西諸島海溝周辺の地震	安芸灘～伊予灘～豊後水道のプレート内地震		6.7～7.4	10%程度	40%程度	50%程度	約67年 ----- -
	日向灘のプレート間地震		7.6前後	5%程度	10%程度	20%程度	約200年 ----- -
	日向灘のひとまわり小さいプレート間地震		7.1前後	30～40%	70～80%	80～90%	約20～27年 ----- -
	南西諸島周辺の浅発地震 ^(注5)		-	-	-	-	- ----- -
	九州から南西諸島周辺のやや深発地震 ^(注5)		-	-	-	-	- ----- -
	与那国島周辺の地震		7.8程度	10%程度	30%程度	40%程度	約100年 ----- -

領域または地震名	長期評価で予想した地震規模(マグニチュード)	地震発生確率 ^(注1)			平均発生間隔 ^(注1) (上段)	
		10年以内	30年以内	50年以内	最近発生時期 (下段：ポアソン過程を適用したものを除く)	
相模トラフ沿いの地震	大正型関東地震	7.9程度	ほぼ0%+～ 0.05%	ほぼ0%+～ 0.9%	ほぼ0%+～ 5%	200～400年 81.3年前
	元禄型関東地震 ^(注6)	8.1程度	ほぼ0%+	ほぼ0%+	ほぼ0%+	2300年程度 301.0年前
	その他の南関東のM7程度の地震	6.7～7.2程度	30%程度	70%程度	90%程度	23.8年 —

+ 「ほぼ0%」は 10^{-3} %未満の確率値。

注1：発生確率の算定基準日は2005年1月1日。これらの評価は、基準日を元に更新過程を適用。また、三陸沖から房総沖の海溝寄りの地震、三陸沖北部の一回り規模の小さい地震、福島県沖の地震、茨城県沖の地震、千島海溝沿いのひとまわり規模の小さい地震および沈み込んだプレート内の地震、日本海東縁部の秋田県沖の地震、佐渡島北方沖の地震、日向灘および南西諸島海溝周辺の地震、相模トラフ沿いのその他の南関東のM7程度の地震については、ポアソン過程を適用。

注2：時間予測モデルに基づいて推定。

注3：千島海溝沿いの区分けした各領域でM8程度のプレート間地震が繰り返し発生するとし、それらの発生間隔はどの領域でもほぼ同程度と仮定した。そこで、各領域の地震発生間隔(十勝沖 108.9年及び51.6年、根室沖 79.2年、色丹島沖 76.2年、択捉島沖 45.1年)の違いをばらつきと見なし、それらの値の平均値72.2年が平均発生間隔を近似するものとした。

注4：過去の地震のMとMwの差が大きいため、Mwも参考として示した。Mwは「モーメントマグニチュード」のことである。地震の規模を表すマグニチュード(M)は、観測点における地震波(地震動)の大きさ(揺れの大きさ)の分布を使って算出するのに対して、Mwは震源の物理的な規模を表す地震モーメントという量を使って算出するマグニチュードである。地震の震源域の規模を反映し、マグニチュードの頭打ち(地震が大きくなるとマグニチュードはその割に大きくならない現象)を回避できるために、物理的な意味が明確な指標である。

注5：これらの領域については、地震発生の特性を明らかにするための十分な知見が得られていないことや、長大な設定領域において発生する場所を特定できないこと等により、対象となる地震の平均発生間隔などを評価しなかった。

注6：元禄型関東地震は、大正型関東地震の想定震源域が房総半島南沖～南東沖へ拡大・連動したタイプとしているので、ここでは大正型関東地震と元禄型関東地震の発生確率を互いに独立して扱うものとは考えていない。

注7：南海トラフで発生する地震のうち、東海地震については中央防災会議が国としての評価を「東海地震に関する専門調査会報告」(2001年)として公表しており、中央防災会議はこの報告の中で、東海地震がいつ発生してもおかしくないとしている。想定東海地震の震源域が単独で破壊した事例は知られていないため、過去の事例に基づいて発生間隔を推定するこれまでの長期評価の手法では発生確率を求めることはできない。

しかし、地震調査研究推進本部では、確率論的地震動予測地図(西日本試作版、2004年3月25日公表)を作成するにあたり東海地震の発生確率が必要であるため、以下の方法で求めた。

- ・平均活動間隔は「南海トラフの地震の長期評価」に想定東海地震の震源域の全域または一部地域が活動したと記載のある、明応東海地震(1498年)、慶長地震(1605年)、宝永地震(1707年)、安政東海地震(1854年)の4つ地震の発生間隔の平均値118.8年とした。

- ・最新活動時期は1854年安政東海地震とした。

- ・平均活動間隔のばらつきを表すパラメータは、長期評価が行われている東南海地震と同じ0.21を用いた。

- ・隣接する地域と連動する場合と単独で発生する場合は同一の発生間隔であると仮定した。

東海地震は隣接する地域との連動性のメカニズムが未解明であるため、発生確率を求めるためには、上記のようないくつかの仮定を行う必要があった。したがって、長期評価結果として公表している他の海溝型地震の発生確率と同程度の信頼度はないことに留意する必要がある。

確率論的地震動予測地図(西日本試作版)で用いた想定東海地震の確率

地震名	想定地震規模	地震発生確率	平均発生間隔
	マグニチュード	30年以内	
東海地震	8程度	84%(参考値)	118.8年(参考値)

(参考) 1995年兵庫県南部地震発生直前における確率

断層帯名	発生した地震規模(マグニチュード)	地震発生確率	平均活動間隔
		30年以内	
六甲・淡路島断層帯主部 淡路島西岸区間 「野島断層を含む区間」	7.3	0.02%～8%	1700年～3500年